

[Source: Miyasaka, S./Mori, A./Mitamura, M./Fujie, M. (eds.) *Ibunka to no deai* (Papers from the Ferris University International Conference on Japanese Literature, Japan) 2003, pp. 62-74]

— 異文化の目で見つた —

島田雅彦の「ミイラになるまで」について

Alfonso Falero
Salamanca University

レジュメ

日本現代ポストモダン文学の代表者と認められる島田雅彦(1961)の短編集の一つは、『ミイラになるまで』(*Mi farò mummia*)というタイトルでイタリア語訳で1995年、スペイン語訳(*Me convertiré en momia*)で1999年に出版されている。スペインでは他にまったく紹介されていないこの作家は、現在文庫本でさえ読者の手に入れることが可能だ。元のイタリア語版では1991年の『アルマジロ王』から選択された四つの短編を補うために、後書きがついている。そこには島田自身の自己紹介があり、著者はいかにも自分が日本文学の中で異常な作家であることを証明する。それは「国」や「文化」、「家」などに根ざした「アイデンティティ」を知らず、個性のみを持った登場人物によってもまた表明されている。いや個性があるといっても個人一人に一つの個性というのではない。内面的には分裂しているかもしれないがプラスの意味での複数人格を持った人物は典型的なポストモダンな姿を呈しており、それはグローバル時代の人間の特徴に他ならない。更に、著者(=創造主)から著作(=意味)によって読者(=解釈者)へ、といった循環で知られる近代性が超えられている。島田文学では、著者や作品及び読者がすべてデコンストラクションの対象となり、著者はプログラマーで作品はゲーム、そして読者はプレーヤーに他ならない。

そうだとすれば、ミイラになろうと決意をした主人公は別に宗教的な体験を極めようとか、または特に社会に対して抗議行動をしようとかという目的を遂げることよりも、ただ生き物としてあえて言えばライフゲームをしているのだといえよう。そのような遊びには楽しいこともあり、苦しいこともある。なぜならそれは、ライフゲームなのだから。その報償は死だ。しかしそれだからといって、それがわれらの社会と関わりのないただの個人的な趣味でしかない結論づけるならば大間違いである。主人公は自殺を決断する。なぜかというところに関して言及してはいないが、われわれには他の鍵がある。たとえば、他の短編における登場人物と社会との戦いや、島田自身が「ミイラ」に付け加える献辞文などを考慮すると、「ミイラ」が「世界中のハンガーストライカー、断食行者、拒食症患者」などの闘争と関わりを持っていることがわかる。こういった人物は何を拒んでいるのであろうか。それは現代消費社会であらう。断食という行動は同時に消費社

会の当然の結果でありながら、それに対する抗議でもある。消費社会は生気の源を枯渇させ、消費者は消費することによって消費されてしまうという逆説が付きまとう。消費への気力(食欲、性欲)が危機に陥った主人公は自殺をするしかないであろう。ただ切腹といった侍社会と深い関わりを持つ自殺は避ける。したがって、もし食べることを止めるなら自然にミイラになる。それは自然な自殺という逆説を生じさせる。

あくまで自分の自殺をゲームの論理から見て、面白がっている。だからそれを日記にする。しかし、私小説のような主観的な気持ちにあふれた日記ではなく、むしろ客観的に実験者の体験を記したような科学的モデルに従う。あくまでゲームなのだから、別に成仏死に関する日本仏教史のよりどころ(親鸞、一遍)に言及する必要はない。かえって島田は西欧の死生観を代表する「神曲」や近代の死を著者の死として象徴的に表明する S. ベケットなどと対話をする。ただそれらを思想的に受け入れるのではなく、それはむしろ島田文学の間テクニシティ性を示している。つまり、島田文学がもう「世界文学」に対する「日本文学」というカテゴリーの元では理解できなくなり、ただの現代文学の一例になっているということは明らかである。島田文学の普遍性があくまでもそのポストモダンな姿勢と不可避に関わっているとしなければならぬであろう。

目次

1. 島田文学における正常と異常
 - 個人対社会
 - 文化と基準
2. ミイラと禁欲
3. 間テクスト性と普遍性
 - 島田における普遍性
4. ミイラ・自殺・死

1 島田文学における正常と異常

島田は、イタリア語版の「ミイラになるまで」の後書きで次のように言う。

私はスポーツマンだが、絶対筋肉を膨らませることなど心臓や肺に厳しく不健全なスポーツにさらさないで、過度に成らないようにする。特に好きなスポーツとは何かといえばそれはセックスや自慰、飲みに行くことや痙攣、また *bel canto* だ。

。。。。

射精は思考の型にはまったような調和をもたらす道だ。

これは、1987年から1990年にかけて書かれた短編物語についている *Mifaròmummia* (『ミイラになるまで』) のあとがきであり、1995年に出版された。つまり、西歐向きの自己紹介の文章である。短編の内容を確かめると、二つのテーマが目立つ。その一つは、性欲のことで、もう一つは食欲のことである。登場人物は、日本の超産業資本主義に見られる三つの象徴的段階を示している。つまり、消費から死へ、死から再生へという段階である。実際、「ミイラになるまで」の終わりは死であるが、「断食少年・青春」では日常生活に戻る。ただ、後者の主人公にとっての日常というのは、彼がすでに出た(出世)日常なのではなく、かえって生気を回復したまったく新しい心身状態のことである。こうして、主人公は無限消費によって引き起こされる溺死から救われることになる。このような捉え方は、やはりポストバブルの代表的な一つの反省だと認められよう。ここからは、島田が吉本ばななの世代に属することがよく分かるであろう。しかし、その違いは、島田が自己の作品に反映させ、また彼を太宰治から村上龍に至る *enfantterrible* といった作家の仲間に加えせしめている、激しい違反精神及び反ユートピア的 (*distopic*) な主張という二点にあると思われる。

なにしろ島田は、政治家の世界に興味を見せず、「自由と民衆主義」といったものを特に信じるわけでもなく、現実の政治にせよ、ユートピアの空想にせよ、どちらにも属さない。「中国の文化革命にしても、自由と民衆主義にはめられようとした国を解放する

ための捨て鉢な異なのではなかったか」と、島田は同個所で説明する。

個人と社会

島田は、Steve Erickson の著作 *Rubicon Beach* を邦訳する上で、1992年に著者と対談を行った。その意は *Rubicon Beach* の次のような所では表現されている。

私はというとどこにも属していなかった。何かの一員になること自体信じていなかった。そんなことは真実ではないと知っていたし、唯一真実だといえるのは、私自身をしっかりとつことだと自覚していた。

島田文学でも個人は、伝統的に把握された個人とは対立している。たとえば日本の反近代思想を代表する和辻哲郎が主張する「間柄」という概念（中村雄二郎の示唆によれば Heidegger では *Miteinandersein* に対応する）を超越している。また、田辺元による「主」の概念をも超越している。島田や Erickson による個人にとっては、その環境となる都会が記号的カオスになり、町＝ホームといった感情的アイコンとは激しく対立している。つまり、ポストモダンにおけるこのような終末論的個人主義においては、（たとえば、大江や柳田國男に見られるような）実家への回帰という精神が不可能になる。都会がカオスだとすれば、帰る実家も存在せず、起源やそれに基づく「時間」、意味やそれを関連づける「中央」、またそれを守ろうと戦う敵さえもないのである。島田や Erickson の作品に出てくる人物はもう基準によって整えられた世界には住んでいない。むしろマーケットに囚われた世の中に生き残っていくかただ死んでしまうかである。

「ミイラになるまで」の場合は、主人公が逃げ出した都会（近代）に取って代わるユートピアが見つからない。すなわち、「。。若い女性がいつの間にか私の枕元に立っていた。。『さあ何処へなりと連れてって下さい。。』といった。何処にも行くところはありませんよ。女性は投げやりに答えた。」この意味では、もしこのような段落を、明治後期に現れ大江によってその限界まで検討され尽くした「古里帰り」文学といった難解な概念と比べるなら、島田は確かにその一歩先を行っているといえよう。なぜなら「ミイラ」の主人公には帰る所はないからである。ふるさと文学を特徴づけるような懐かしさが感じられないのは、彼が都会の生活しか体験していないからであろう。危機を感じたとたん何かに帰ろうと思ったとしても、何も取り戻すものは浮かばない。すなわち、

今ならまだ間に合う。ここに来た時通った道を逆に辿ってゆけば、生の方に戻れる。。一週間もすれば、体重六十五キロの元の体に戻り、あと二、三十年は生きるだろういや、生かされることになるだろう。今まで通りこの世の利害とは何の関係もないまま。

つまり、島田の1987年から1990年までの作品における個人の特徴は何かといえ、それは都会という環境において生じる諸脅迫に攻められ、その結果としてその心身の健康が脅かされてしまうことである。これが確かに村上春樹のような多くのポストモダン作家にも伺われる特徴だとしても。

文化と基準

島田に日本主義は見出されないが、変わりに国際主義が唱えられるわけでもない。むしろ面白いのは、伝統的な日本文学で決められた循環、すなわち海外＝憧れと日本＝懐かしさといった関係性は逆転され、その代わりに見出されるのが、島田文学の登場人物にとっては日本が疎遠になってしまったという現実であり、その中では死が「絶対他」への出会いの解放的な道だということである。こうして、島田は個人の道にある種の超越的な意義への可能性を開いてくれるといえよう。ただそれはまた、宗教へ導くとは言えないであろう。

2 ミイラと禁欲

「断食少年・青春」(1990)において主人公は精神科医に行かされ、そこで次のような問いと返事が交わされる。すなわち、「断食をすると、精神が浄化されるというが、君はそれを信じるかね?」「本当にそうなんですか?」、と。1990年の短編においてミイラになることや拒食症などは断食の結果であり、その原因ではない。人物は何か積極的なプログラムを実行しようとはせず、ただの精神的な空虚を証明する「無食欲」を示す。それによってこの人物は心身の健康・不健康に関する特殊な感性を表している。すなわち、「Mは溪流のほとりで澄んだ空気を吸い、冷たい岩清水でビタミン剤や栄養剤を飲む」と。日本の民俗学者に聞けば、これはケ(=生气)とケガレ(=消費)という象徴的な関係を示していると言われるかもしれない。だから、ハンストに参加する人は食べ物のことを考えると、罪を犯しているかのように感じてしまう。「断食少年」に出てくる主人公の相手は「肉体と魂を浄化したいと願っているのだった。彼女は即身成仏をした坊さんをガンジーよりも尊敬しているといった。」彼女にとっては、確かに即身成仏の理想には精神的な意義があり、それは食欲や性欲の欠如を生じさせる。理想としての死が、ここでは個人に固有の死/解放になっている。「ミイラ」の主人公の場合、自分が山に囲まれる以前からはもう既に死んでいると認識している。一方、「少年」たちは無限消費を否定する過程を通して最終的に日常を取り戻すことになる。

3 間テキスト性と普遍性

島田は、「ミイラ」において世界文学を二個所で拠り所としている。その一つは、ダンテによる『神曲』の中の「地獄篇」で、もう一つは Samuel Beckett 著『マロウンは死ぬ』

である。『神曲』に関しては、すなわち

きょうは『神曲』の『地獄篇』を読んだ。私は信仰心を持ったことがないが、世界に数多くいる神々に対しては礼儀正しくありたいと思う。何処かの神がお情で私を拾ってくれることもあるだろうから。『地獄篇』を読みながら、あの世で最初に誰と会うか考えた。読書に疲れて、ラジオをつけたら、「きょうも人生を美しく磨きましたか？」と爽やかな女性の声でたずねられた。こういう女性が黄泉の入り口の受付にいたらいいのに。

『神曲』というテキストは、もはや現代では宗教とは関係なく、世界文学史の古典になっている。島田は、調子の深く暗いテキストをラジオ放送者の爽やかな声と対照することによって、デコンストラクショナル的な捉え方を強調している。言い換えれば島田は、中世のパトスを現代の感受性と対立させることにより、その間の距離をあらわにしている。島田のこのような扱い方は、たとえば大江の『懐かしい年への手紙』に見られるダンテの精神的・象徴的な受け入れ方と激しく対照していると思われる。ダンテの文学は日本近代の作家や思想家に知られていなかったわけではない。明治においては内村鑑三の名前が挙げられるし、また若い時の西田幾多郎や宗教哲学者の波多野精一などが利用した資料の中にも見出される。島田は、『アルマジロ王』(1991)に掲載されている「ユダヤ系青二才」において『神曲』を引用するのだが、その象徴的解釈は『神曲』という名を借りたゲームを叙述の中に持ち込む時に破壊されてしまう。『神曲』は実に「分裂気味の人間のリハビリテーションに向いていた」といわれる。こうして島田は、『神曲』の伝統に基づいて「誠のつながり」を持った「大建築」(Schopenhauer)と呼ばれ、聖典とされているテキストの継承をつぶしてしまう。それに対して、大江の受け入れの仕方は正統的だといえよう。つまり、近代とポストモダンの一つの相違点はそこで顕著に現れるのではないか。「ミイラ」に出る『神曲』は炎に燃え尽くされる(これは消費そのものをイメージ化した面白い隠喩なのではないか)。すなわち、「『神曲』を一枚ずつ破りながら、洗面器の中で燃やした」と日記の中でいわれている。

一方、ベケットについては、「ミイラ」の日記では次のように書いている。「読書。ベケットの『マロウンは死ぬ』。よく理解できる。断食しなければ読めない本だ。」西洋文学においては、『マロウンは死ぬ』とは小説家の失敗を証明しようとしている作品である。それは近代文学の死のメタファーでもある。これについては、H. G. Blocker・Chr. L. Starlingは次のように指摘する。

こう考えると、あのポストモダンの表現の先駆者、Samuel Beckettをもまた(日本式)小説の最も優れた西洋の実行者と命名しえないだろうか。それ

は、その文体における類似性が両方の観点の同一性を証明しているからだ。

この点で、島田は日本思想家による近代の超克とは違い、実はベケットに近い。「ミイラ」で日記を記すというのは、『マロウンは死ぬ』と同じく西洋の伝統的修行とは異なる。「Samuel Beckett も発見したように、われわれは、沈黙につくまで自己を語るしかない」と Blocker・Starling が主張する通りである。更に、書くこと自体には、伝統によって聖化された領域に立ち入る力が備わっているのではないだろうか。「日記」には著者がいるのだが、実はその社会的な属性に関しては何も知らされていない。

。。変わり者であることだけは間違いない。どうやらこの死者は誰からも探されていなかったし、その死を悲しむ者もない、世の中から忘れられた男だったようだ。死者本人もそのことはよくわかっていたふしがある。

読者にとっては、確かに「ベケットが言っただろう通り、また Michel Foucault が確認したと思われるように、語る者がだれかかってかまわないじゃないか」(Miyoshi)。マロウンの死はすなわち語り手としての主体というフィクションの死に他ならぬ、自己同一性の場としての主体の崩壊でもある。ここから、フーコーが言う通り、新主体は言語そのものである。「ミイラ」の場合はこのことを確認する二点が見出される。それはまず、集合する力を否定する「外」の場、すなわち山にあり、また一方で日記を書こうという意図から離れた、記述的な手方の選択にあると思われる。『ミイラになるまで』のイタリア語版についている後書きで、島田は自分の小説論を明らかにする。

他人が考えてくれた物語を細かく砕いて、次にそれに論理的な構えを付け加え、名前を取り替えて自分のサインをつく。著者はまったく不必要。小説は不純なジャンルとして生まれたもので、それは神話や巷談、伝説や説話などというさまざまな骨組みに投げられた言葉が集まった墓地だ。しかし世界中、幾千の作家は自分の小説の作者としての資格を疑わずに誇っている。彼らは特定のアイデアが自分だけの発見だとしている。彼らは小説とは何かということをも悟らないまま、つまらない思い出ばかりをつめこんでそれにただ色を塗っているばかりだ。

この観点から「ミイラ」の日記を見ると、やはりこのテキストはコラージュの形を示していると認められよう。つまり、そこで見つかるのは自由連想によって交じり合うレファレンスが作りだす記号網に他ならない。日記を書く人はただ自己の崩しつづれるさまを観察することだけで済む。

以上のような作品や理論を提示する作家は普遍的な文学に属する者として認識するし

かないであろう。沼野光義が説明するように、伝統的に使用されているいわゆる「世界文学」、つまり日本文学でないものという概念はもう現実から完全に外れているといえよう。更に、「世界」というのがもう西洋文学といった狭い意味で使うことはできなくなった。実は明治以降もうすでに純粋な意味での「日本」文学というものは存在しない。はたして漱石は西洋的な作家であるというより日本的とだといえるであろうか。いずれにしても、川端や谷崎の場合と同じように、それは混合文学だと認めなければならない。何しろ阿部公房や大江健三郎の国際主義の路線を継承している島田の場合にはなはだそうである。島田文学において「日本」に対する「世界」という対立はいったいどういう意味を持つのであろうか。日本近代文学を特徴づける、すなわち「日本的」な近代化を追い求めるということに対しては、ポストモダンの島田の場合、その欲求はもう超えられ、それに伴う緊張も緩んでしまっている。「日本」的な文学にせよ「国際主義」の文学にせよ、近代化の産物であることに相違はない。その起源が同じところにあるとすれば、国際主義を支持しようとした場合も、それは世界中で消費化されうる規定された文学を創ってしまうことになる。世界に通じる文学を創るといのは新しいことではなく、それはむしろ諸国の文学においていまだ完成されたいとは言えない、以前から存在するプロジェクトである。これからの道を開いてくれる一例として、島田は日本文化史の中で大切な課題の一つである「即身成仏」を小説のテーマにすることにより、新しい視野から日本文化史を問うているということができよう。

島田における普遍性

島田の優れた方法とは何かと言えば、とりわけ「ミイラ」を例に挙げると、それは日本文学史の中でもっとも大事な伝統である日記のジャンルを借用しながらも、季節の言葉は出てこないし旅行記でもない、日本の伝統とも関係がない「法医学の実際と研究」という資料に載せられた一例の報告書をモデルにしている所にある。そこからは島田文学のユニークな普遍性が明らかになってくると思われる。

4 ミイラ・自殺・死

もう一つ問題は、島田による死ぬことへの問いそのものにある。われらは一般に人生の意味を問わず生きている。島田が「ミイラ」において解き放された立場から死の問題を問うているという点には何らかの悟りの姿勢が見られるのではないか。これが可能となるのは、一つにおそらく中村雄二郎が唱える「成る」の論理、すなわち「あることが自然に意図なしに完成することに至る」という意味での「成る」の思考がそこに刷り込まれているからだと思われる。「ミイラになる」ことにははっきりした目的があるのだろうか。それを伝統の中で言う即身成仏だとか極楽往生だとかとするのは難しい。ここで「成る」(pathos)というのとは、「する」(poiesis)の存在的レベルに対して、

中村によると意図的に原因となる状態とは反対の根本的に既定された、すなわち西田幾多郎が呈出した「場の論理」のような枠組みの中で理解することができよう。

ミイラになることは、あくまでも生と死がふれあう接点を体験することで、その経験はある種の悟りであるとしか考えられない。人物の最後の言葉、すなわち「光っている」にはその意味があるであろう。悟りの場合と同じように、その体験者以外、われらにはその内容が把握しえない。

ミイラになることはどういう自殺のことであろうか。日本文化における自殺について論じた A.Kojève によれば、すなわち「原則として日本人の例外なく誰でも、ただのスノッブ的言動から、純粋に無根拠の自殺をすることができる。…それは社会的・政治的な意味をもった歴史的価値のために戦った戦闘における命の危険とはまったく関係はない」というよく知られた文章がある。しかし日本近代史における自殺のあらゆるモデルの中には、個人が国家に対して、または国家のために行う種類のものがある。その典型的な事例として三島の切腹がある。ただ三島の自殺 (M.Pinguet 以降明らかになった通り) は、切腹のコピーに過ぎない。それ以降もう切腹すればそれが三島の切腹のコピー、すなわちコピーのコピーに成ってしまう。「ミイラ」の日記の中でこのような意識が激しい。

もし、私が切腹を試みても、笑われるのがオチだ。三島由紀夫さんは半分冗談、半分日本の社会に対する悪意で腹を切ったが、それは「今より誰も切腹してはならぬ」と将来腹でも切ろうと考えている連中に警告するようなものだった。私も三島さんに呪われた。だから、切腹以外の死に方を考えた。それが断食自殺である。

つまり切腹は危機を感じた「武家社会という一種のサラリーマン社会」によるパフォーマンスに過ぎない。一方「ミイラ」の自殺をポストモダンの視野から見ると、A. Wolfe が言う「文学の自殺 (*literaturicide*) すなわち象徴的自殺」のことになる。Wolfe に依れば、「全人類 (または自分の読者) へのキリスト的な自己犠牲のジェスチャーのように著者・創作者・芸術家の死を強調する近代的・ロマン主義的な視野とは違って、ポストモダンの視野からはともにナレーター—著者及び聞く人—読者の死を仮定しているように見える」とされる。

しかもそれだけではなく、実は日記の作者は異なった形の自殺をすることによって消費社会の悪循環から逃げ出すことを求めている。島田文学において幾人かの人物が示す社会反動的な行動は、生き残ることの上で貴重な感情である恐怖の再生のことを意味しており、今回その対象は食べ物と性に向けられている。すでに『優しいサヨクのための喜遊曲』(1983)で島田は現状の社会問題に対して実行できる解決法が見つからない世代の姿を描いている。しかもこのように描かれたポストモダンとは、Fr. Jameson によ

る批判的論説に照らしてみると、どうなるであろうか。社会的絆を切った個人の精神の世界に戻ってしまうと、独立の幻想が生じるが、実は国家やマーケットの権力にかえって無力化されてしまう。ジェームソンはポストモダンやグローバリゼーションの現状には複雑な現実的関わりや矛盾したレベルがあると認めるべきだとしている。つまり、ポストモダンの大衆文化は国家の集権主義に対抗して散乱への傾向を示す。しかしグローバル資本主義の論理に抵抗しようと思ったら、マイクロ文化的・個人的な差異を主張するよりむしろそれぞれの国家のアイデンティティを守るべきだとしている。ではもし「ミイラ」の日記が政治的な意味をもっているとするれば、誰を支持しているのであろうかという問いに直面してみなければならない。たとえばもしわれわれが皆、自殺者が体験する「光」を自分で確かめてみようと思ったらどんなことになるであろうか。現実には大衆自殺が起こったら間違いなく資本主義社会の終わりであろう。したがって自殺者の事例が、一つの行動パターンとして理解された場合、第一世界の秩序に対しては政治的に危険なものになりうる。しかしまたそれを象徴的に捉えることもできる。その場合は、自殺をテーマにしたさまざまな消費製品、たとえば文学やフェティシズム、パフォーマンスや倒錯した好奇心さえ求められることになるであろう。実はマーケットの威力はある危険性を持った物質的なものを文化製品に変形させる力によく現われている。文学という活動においてはあくまでも両方の可能性が含まれている。それはまた著者・マーケット・読者という循環に内在するあらゆる可能性を示しているのである。「日記」の作者の場合は、国民＝消費者という幻想から目覚めている。言い換えれば、自殺者という個人は、社会のため、国のため、全人類のために自己をつくしきさげべきだという論理から逃げ出しているのである。つまり、われわれは「ミイラになるまで」のような文学作品において含まれる抵抗(resistance)の可能性を否定することができない。結論として、島田文学を例にして、筆者はポストモダン文学を抵抗(デコンストラクション・コンストラクション)の想像上の場として評価すべきであり、そのなかに個人に対する解放の契機が含まれるのだと考える。

2002

参考文献

- Erickson, Steve (1986) *Rubicon Beach*. Quartet Books. 1998
- 大江健三郎 (1987) 『懐かしい年への手紙』 講談社
- Gabriel, Philip (1999) “Dream Messengers, Rental Children, and the Infantile: Shimada Masahiko and the Possibilities of the Postmodern” en Snyder/Gabriel, 219-244
- Sauquillo, Julián (2001) *Para leer a Foucault*. Alianza Ed.
- 島田雅彦 (1991) 『アルマジロ王』 新潮社
- Mi farò mummia*. Marsilio. 1995
- Me convertiré en momia*. Amaranto. 1999
- (1990) 『ドンナ・アンナ』 新潮社

- (1990) 『ルナ』 河出書房新社
 (1990) 『ロココ町』 集英社
 (1990) 『天国が降ってくる』 ベネッセコーポレーション
 (1989) 『夢使い』 講談社
 (1989) 『僕は模造人間』 新潮社
 (1983) 『優しいサヨクのための嬉遊曲』 新潮社

Jameson, Fredric (1998) “Notes on Globalization as a Philosophical Issue” en Jameson/Miyoshi, 54-80

Jameson, Fr./Miyoshi M. (eds. 1998) *The Cultures of Globalization*. Duke U. P.

Schopenhauer, Arthur (1837) *Los dos problemas fundamentales de la ética*. Siglo Veintiuno

Snyder, St./Gabriel, Ph. (eds. 1999) *Oe and Beyond. Fiction in Contemporary Japan*. Univ. of Hawaii P.

Dodd, Stephen (2001) “Kunikida Doppo --- A Site of No Return” en Nagashima, 101-108

中村雄二郎 (1997) “Logique du lieu et profondeurs du régime du *tenno*” en Berque, A./Nys, Ph. (eds.) *Logique du lieu et oeuvre humaine*. Ousia, 229-256

Nak-chung, Paik (1998) “Nations and Literatures in the Age of Globalization” en Jameson/Miyoshi, 218-229

Nagashima, Yoichi (ed. 2001) *Return to Japan. From 'Pilgrimage' to the West*. Aarhus Univ. P.

Napier, Susan (2001) “Hybrid Identities --- Oe, Japan, and the West” en Nagashima, 320-328

沼野充義 (2002) 『W文学の世紀へ。境界を越える日本語文学』 五柳書院

Field, Norma (1989) “*Somehow*: The Postmodern as Atmosphere” en Miyoshi/Harootunian, 169-188

Blocker, H.G./Starling, Chr.L. (2001) *Japanese Philosophy*. U. of N. Y. P.

Beckett, Samuel (1956) *Malone Dies*. Grove Press

Miyoshi, Masao (1989) “Against the Native Grain: The Japanese Novel and the ‘Postmodern’ West” en Miyoshi/Harootunian, 143-168

Miyoshi, M./Harootunian, H. D. (eds. 1989) *Postmodernism and Japan*. Duke U. P.

Mortensen, Finn H. (1996) *Kierkegaard made in Japan*. Odense U. P.

Wolfe, Alan (1989) “Suicide and the Japanese Postmodern” en Miyoshi/Harootunian, 215-233

Alfonso Falero Folgoso 2003